

# 時潮の波の

(昭和二十一年寮歌)

渋谷富業君 作歌  
寺井幸夫君 作曲

## 序

厳しかる道に仕へて  
限ある玉緒惜しむ  
げにさあれ深き因縁の  
魂ゆるする生命の饗宴  
汲まざらめや残の月に  
旅の朝早くは明けぬ

一

時潮の波の寄する間に  
久遠の岸に佇みて  
不壊の真珠を漁りする  
嗚呼三星霜の光采よ  
緑の星を夢む時  
疎梢を払ふ天籟は  
秘誦の啓示語るなり

## 二

孤窓に流る星屑に  
無辺の調律訪へば  
測りも知らに底つひゆ  
言の葉洩れて伏し祈る  
奇しく貴き生命をば  
友情を讀ふ歌声の  
溶け行く方に馳するかな

## 三

朽葉ゆらぎて湧き出づる  
楡の林の真清水に  
己を責めて泣く友の  
拐杖を運ぶ逍遙や  
遠き誓ひの日を偲び  
虚しき春に嘯けば  
淡れし影の寂寥よ

## 四

宿命の道を行く身にも  
友を誇らん花筵  
銀燭頬涙を照らす宵  
沈黙に語る歡喜よ  
心を交し思ひ酌み  
団欒にふるふ共鳴は  
胸の小琴を掻き鳴らす

## 五

北斗頭上に影冴えて  
神秘の息に吹かれつつ  
肩組み歌ふ旅の子を  
染むる伝統の篝火よ  
暮るるに早起青春の日の  
追懷を込むる此の盃を  
汲まん今宵の記念祭

## 結

近きかな楡陵を去る日は  
還り来ぬ足跡愛しみて  
ひたぶると打笑む時ぞ  
求めつつ得べからざりし  
秀逸しき真理の道は  
はろかなり我等が前途  
進まざらめや